

資料：高知ダルクによるゲストスピーチ逐語録

Document : A Literal Record of Guest Speeches by the Members of Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)

加藤 誠之 (高知大学教育学部)

高知ダルクの皆さん

KATO Masayuki 1, Members of Kochi DARC 2

1 Faculty of Education, Kochi University

2 Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center)

ABSTRACT

29th July 2015 and 27th July 2016, we had guest speeches by the members of Kochi DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center) in the lecture of “Student Guidance” at Kochi University. This document is a literal record of these guest speeches.

I. はじめに

筆者は、自分の担当している「生徒指導」の講義で、2015（平成27）年7月29日（水）及び2016（平成28）年7月27日（水）に、薬物濫用経験者の自助グループ高知ダルク（DARC, Drug Addiction Rehabilitation Center）のメンバーの方をお招きし、ゲストスピーチを行っていただいた。本稿はこのゲストスピーチの逐語録である。

本稿では、聞き取れないところは……で示した。また、固有名詞などは伏字にした。

II. 2015（平成27）年7月29日（水）のゲストスピーチ

【Aさん】

高知大学の皆さんおはようございます。自分自身、今**施設の方に入所させていただいています。入所して、1年半、1年6ヵ月、依存症からの回復、薬物からの回復。いろんなプログラムに、取り組んでいます。デイケアセンター……。料理にしたり、運動にしたり、いろんなプログラムを経験して、仲間とともに成長していく、そんな事を日々取り入れて、活動しています。

自分自身、薬物をなぜ使ったか。自分自身、生まれたのは南国の沖縄で生まれ、沖縄の離島の方で小学校まで育った。小学校のころは、家庭がどうのこうのってことは無かった。普通の家庭。まあ、両親の仲が悪かったということもなかった。あとは、自分自身の問題。

まあ友だちという方が楽。そういう風を感じ始めると家にも寄り付かない。友だちと遊ぶ。その中で、悪いことを覚えていく。その生活をする中で、やっぱり中学の時から、先輩とつるむようになる。そんな中で悪いことをたくさん覚えていく。その後も、行くところは決まっている。鑑別所。少年院。

まあ、自分自身、おそらく1年の3か月間は少年院。16歳まで少年院にいた。その中でも少年院を脱走したりとか。自分の中で、少年院は悪い仲間を作る場所。更正するなんて考えたこともなかった。友達とつるむのが楽しかった。悪いことをするのが楽しい。そういう生き方、やっていた。

少年院を出たら、少年院はヤクザの登竜門だとよく言われる。自分もその道に歩んだ。少年院で出会った先輩。そういう風に、仲間と連絡を取り合い。少年院を出たら迎えに来てくれたのが、両親や友達。まあ、少年院でも自分自身、両親が面会に来てくれなかった。両親が離島の方に、離島から本島に、舟の関係。そういうこともあって、3か月に1回でも面会に来てくれたらよかったかな、そう思っている。その中で、一つの自分だけは違う

など、親に見放されているかなど、そういうことも感じた。それを恨んでいるとか、そういうこともない。まあ、少年院で両親が迎えに来て、何が楽しいかという差し入れ。コーラ飲んで、そういうのが楽しかった。そういうことを自分自身があまり経験できなかった。実際に、面会にあまり来てくれなかったから。

少年院は少年院で、自分自身、結構楽しかった。悪いことをするのに、いいことをするのに、少年院はやっぱり仲間。全員で、一生懸命に、いろんなことをやっていた。

まあ、組織につながってもそう。ヤクザ社会。かっこ良く言えば、任侠道。悪く言えば、暴力団。実際自分自身、暴力団という言い方はどうかなど。毎日暴力をふるっているわけではない。よく暴力団というと、女性を売り物にするとか、一般社会の、堅気の間人を殺すとか、全部がそうではない。報道のあり方、そういうものをちょっと問題あるかな。まあ、暴力団を悪く報道する。

確かに、非社会的な集団。それでも暴力団の人にも、生きる権利がある。そういうこともある。まあ、自分自身、16から43歳まで組織にいても後悔はしていません。あれは、あれでよかったなど。その中でも得たものも結構ある。今の施設に繋がっている。それを利用して部分もある。活かしている部分もある。逆に悪い部分もある。悪い部分をいかに変えていくか。そういうことも少しずつ学んできましたし。そういう自分の短所。生き方を変える。やり方を変える。そういう作業。

依存症は、難しい。正直。一般の間人に対しての、自分はこうだとか、ああだとか言っても理解してくれない。やっぱり理解してくれないと、同じ仲間。依存症という、同じ病気を持つ仲間。依存症に手助けをできるのは、依存症だとか、そういうことは思う。自分自身は、話させてもらっても大学生の皆さんには、正直理解してもらっているか、いないかわかりません。まあ、自分の体験、経験を話すことしかできないし。

まあ、薬物を経験しないと、薬物依存症の気持ちはわからない。まあ、頭で考えるより、想像するより、病気が重い人、回復の具合も全員違う。その中でも、いろんなプログラムさせてもらっている。日々、生活している中で、いろんな苦楽、問題与えられる、それをうまくどうしたら良くなるか。どうしたら変えていくことができるか。どうしたら、考えとか、やり方を改められるか。そういうことも自分自身に繋がって、結構できるようになる。以前見えなかったものが見えるようになってくる。

まあ、薬を使っていたら、何が始まるかという、自己中心、独りよがり、自分勝手、嘘、言い訳、そういうのが全部出てくる。まあ、薬を買うために嘘もつく。時

間もあってないようなもの、そういう生活に入る。その中で、楽しかったかという、自分自身、薬を使ったことには楽しいと思える部分と、やっぱり自分自身の逃げだっただんだと思う部分と。

自分自身、なぜ覚せい剤を打つかという、自分自身、組織にいて、組織の抗争、やくざ同士の抗争。テレビとか新聞、雑誌とかで、聞いたり見たり。やくざの世界はやるかやられるか。男の世界。やられたらやり返す。そういう日々の生活。自分自身、襲撃とかそういうことに、刑務所に入ったこともあるし。

自分自身のいた組織は、最初から二つに割れていた。その中で、よく割れずにもったなど自分自身も思っていた。1回は割れても、また元に戻る。そういうのを繰り返して。結局最後は、仲間同士の打ち合い。そういうことから、組の解散。自分自身の兄貴分。それも絶縁、破門。そういうことから、自分自身、組織との縁が。そしたら何をするか。以前から、覚せい剤は目の前にいくらでもあった。でも、やっぱり組織では御法度。そうはいっても、打つ人は打つ。それはもう自分の問題。

自分らは、覚せい剤の売(バイ)。売り買いもやっていたし、目の前にいつもあった。言われていたのは、「打つなよ。打ったらわかるだろ、お前この世界では抹消だぞ」。そういうことも自分自身ずっと言われていたし、抗争が始まるまで一回も使ったこともなかったし。まあ、やろうと、そういう気持ちもなかった。覚せい剤を使ったら、何が始まるかとやっぱり不安。子分、組織にばれたらどうなるか。そういうことが、不安が頭の中をめちゃくちゃ。回数が多くなる、量が多くなる。その中で、人を避ける。結構、めんどくさい生活に入っていく。

自分自身、家庭を持っていた。今、娘30歳。正直、家庭内別居。まあ、元家内とは口を利かない。子どもも避ける。そういう生活が一番厳しい。自分自身が辛かった。その中でも薬を辞めようとか。思っても不安とかそういうのから、また薬に走る。そうしているうちに、刑務所にも入った。最後に刑務所に入ったのは、シャブ、覚せい剤取締法違反。その時、正直、自分自身刑務所に入るのが恥ずかしいな、元同じ組織のメンバーから「こいつ、薬で来たんだ」。

以前、自分自身が初犯で刑務所に入ったとき、6年。その時、同じ組織の仲間もいた。結構自分自身、天狗になっていた。「お前ら、シャブで来てるんやろう、俺は組織のために来てるんや」。そういう風なことで、自分自身が天狗になって粋がっていた。実際自分が逆の立場になると、自分がシャブで刑務所に入る。地元の組織に、ほとんどが顔を知っている。その中で、刑務所で半年ぐらい。生きづらい。自分自身、縮まっていた。

その時は、もう堅気になっている。そのこともあって、

自分自身、声が小さくなっていて。その中で、交際するどころか、やくざ連中とも話していても、そう変わりない。堅気になっても、組織にいても一緒だなど。付き合い人間はいっしょ。やることも一緒。自分自身を変えていかないと、何もできない。思っても、迎えに来るのが組織の人間。となると、どうなるか。やっぱり薬を打つ。自分自身、刑務所を出ても3時間後ぐらいには、シャブ打っていた。

その中でも、薬を使い続ける。飯も食わない、その中で体調を崩す。そのお蔭で、入院させてもらって、今の生活ができる。自分自身、薬を使って、入院して、手術もして。そのあとも精神病院で、今の高知ダルクにつながるまでの間精神病院で置かせてもらって、いろんな準備、高知に行く準備。

そういうことをやりつつ自分の中で、薬中ばかり集まって、何ができるんだ。そういうことも思っていた。同じ薬中が集まったら、どうせ薬使うんだろう。自分自身もそう思っていた。でも、今は全然正直考え方が違っている。自分自身、回復するには分かり合える仲間。共感できる仲間。そういうのも必要だなと感じ始めている。また、いろんなプログラムさせてもらって、自分自身も変わったと思っている。

今は、薬物のない生活。そういうことから、いろんな考え方もできるようになって、やり方も、いろんなやり方もあると学ばせてもらった。今は、生き方がだいぶ楽になったかな。時間の無い中、自分の話は尾張氏にしたいと思います。ありがとうございました。

【Bさん】

こんにちは。私は**といます。私は11歳のころから父がアルコール依存症で、ずっと言葉の暴力があり、否定されてきた。母が、私の代わりに、全部先々とやって支配する母だったので、自分の意見が言えなくなり流されやすくなっていて、生きにくさをずっと感じていた。また学校でも家でも居場所がなく、中学校の時に、母に私の居場所が無いと言ったことありますが、なぜそういう言葉が出たのか当時はわからなかったが、今となって考えると、寂しかったんだろうなと思います。

20歳のときに初めて薬物を利用しました。私は、友達の家遊びに行ったら、友達の彼氏が売人で、4人で覚せい剤を打ちましたが、最初に勧められた時も特に怖いとも思わず、好奇心でやりましたが、薬が切れた後、すぐ後悔をし、もう二度とやらないと思い、その時は一度でやめました。

高校を卒業してから、正社員で働いたり、アルバイトをしていましたが、23歳の時に手に職をつけたいと思い、美容師を志しました。美容専門学校の学費を稼ぐために、

水商売をし、学校と二足の草鞋で、26歳で国家試験に合格し、美容師になりましたが、パワハラがすごくノイローゼになり、一年でやめてしまいました。すごく憧れていた店だったし、何のために嫌な水商売を3年もして勉強も必死でしたんだらうと、その人をずっと恨みました。

その後、躁鬱病と強迫神経症になり、精神科から出された、精神薬の多剤処方、攻撃的、行動的、食欲も増して、40キロも増え、この精神科でもらった薬の副作用で悩みました。そして、31歳の時に再びある人から覚せい剤を勧められ、今度は注射でした。

20歳の時はあまりはまらなかったから、一度だけならと思って、腕に打ってもらったら、最初は吐き気がすごかったのですが、全身の力が抜ける感じの気持ちよさで、もう地獄への入り口でした。もう二度とやりたくない何度か思っていたり、両親や友達などにもうやらないとか、本当にすみませんでしたと謝ったり。ぶりっ子を被って薬をやりに行ったり、やくざに拉致られても辞められず、友達全部離れました。精神科の薬と市販薬依存もあり、いろんな病院で嘘を言って、薬をもらい、缶に溜め込み……を何十回もして救急車で運ばれ、胃洗浄もしました。

私は、小さなころから大人しく、発達障害もあり、いじめられっ子で、感情を表に出すことが苦手ですが、施設に繋がり裏で人の悪口を言わない、自分の意見を言うように努力しています。なかなか長年こういう生き方をしてきたので変えるのは難しいのですが、変えられないものは、変えていくべきという言葉の通り自分の生き方を変えていきたいです。

薬物依存症は犯罪とか意志が弱いなどしか世の中では言われていないですが、意志の力ではないということがわかりました。また薬物依存症になった責任はないけど、回復は自分に責任があるので人間関係や、難病の活性膀胱炎など辛いこともあります。仲間とともに明日はどうなるかわからないから、今日一日で生きていきたいです。最後まで聞いていただいて、ありがとうございました。

【Cさん】

高知ダルクの日中活動の施設、本町にあるデイケア、日中にプログラムを行う、職員をしている**と申します。よろしくお願ひします。僕自身、薬物依存症で高知ダルクのほうに3年半ぐらい入寮していました。

そのあと施設を出て、自立をしてほかの仕事をしていたんですけども、なかなか体の病気なんかもあり、続けることができなくてですね、ちょうどそのとき、日中に薬物依存症のリハビリを行う施設を市内に開設するっていう話が合って、その時に職員やらないかっていう話が

あって、去年の12月にできた施設ですけどもそこで今、職員をやらせてもらっている。

まあ、何を話そうかと思ったが、僕自身の話をするのがいいのかなと思うんですけども、あの、僕も皆さんと同じように大学を卒業しているんですけども。あの一、大学3年生というともう、就職活動をしますよね、みんなね。僕は、しなかったんですね。

まあ、なんでしなかったかという、その自分が何をやっていいかというのがよくわからなかった。小学校・中学校・高校・大学と、普通に進学していく過程で、いわゆる自分の生きる方向性っていうかそういったものを早い段階で見つけていく奴っていたなと、今振り返って思いますね。もう、うん家業を継いだり自分はこの仕事をするんだとか。

そんな中で、自分はもう何ですかね。んー、とりあえず音楽は好きだったです。まあ、でもバンドなんかやったりして、でもそのプロになりたいと思うような熱意があったかという、そういうわけでもなく。大学でも勉強もせずバンドばかりやっていたんですけども。

そういった音楽の1960年代くらいの音楽のミュージシャンの中ではその、あの当時、あの年代ではドラッグがすごく流行った時代で、薬物をヘロインだったり大麻だったり、LSDだったりね。そういう薬物を使っているミュージシャン。僕は好きだったんですね。そういうミュージシャンが。

そういったころから高校の時には薬物には興味はありました。高校の時の卒業アルバムにインドから草を持ち帰って売りさばくというようなことを書いてあって、その時にそういう思いがあったのかと思うんですけども。

でも、僕自身が本当に薬物っていうものをやったのは23歳なんです。大学にいるときに、パーティーがあって、マリファナ吸えるよっていう話はあったんですけども、僕は行かなかった。日本でそういう犯罪行為をやるのはやばいって自分は思っていましたね。

いわゆる不良少年でもなかったです、僕は。ただ、方向性が見いだせない、自分の行くべき方向性が見いだせないという感じの子どもだったなと昔から思います。

結局、大学卒業して何をしたらかという、就職せずにバイトでお金をためて、アジアのインドとかタイとか、アメリカとかヨーロッパとかそういったところにバックパッカーといいますか、バックバックをもって旅をするんですけども、旅というよりもドラッグ旅行。ドラッグやるために行きました。いろんな薬物をやりました。一番はまったのはヘロインなんですけども。

日本に帰ってきて、僕の好きな薬物っていうのがなかなか手に入らなくて、ヘロインだったりサイケデリックって言われるようなLSDだったりっていうのがなかなか

手に入らなくて、偶然知り合ったのが、出会ったのが覚せい剤だった。それまでいろんな薬物を経験してきた自分だったんですけど、その中でそんなに大きな問題を起こすということはなかったんですけども、覚せい剤がたまたま体に合ってなかったのか、それまで使用していた薬物の影響で頭がちょっと壊れていたのかわかりませんが、すごい状態になってしまった。

幻覚、幻聴。見えるはずのないものが見える。聞こえないはずのものが聞こえる。そういう状態にあって、誰かに付け狙われているとか、そういう感じになっていた。家から出れない、外に出れば周りの人間全員が敵みたいな感じに思えた。どんどん生き方っていうのが、悪化していきました。

30歳ぐらいの時に、ダルクっていう。僕、精神病院に3回入院してるんですけども、最初の入院の時に病院に地元の大阪にあったダルクから薬物依存の回復のプログラムがあるよっていう、一緒にやりませんかっていう話を病院まで来てくださった。そこで、僕はそのプログラムをやるよという気にはならなかった。一応、家族も勧めた。父親、母親、妹の勧めがあった。

一応、ミーティングというものに参加はしたんですけど、そこで話されている内容、そこで行われていることは、僕が今いるダルクですけど、その当時、その状況を見てなんじゃこらと。

自分は明らかに生き方がどうにもならなくなってましたね。でも、自分ではそうではないと思っていた。家族が全員、僕のことを見てどうにもならいと。だって、精神病院3回入院してるんですもん。仕事もできなくなって、友達も離れていきますよね。そういう状況の中で、自分はそんなダルクのプログラムをするよな、そんなひどくないか思っていたわけですよ。結局そこでプログラムをやることはせず、騙し騙し、その後の10年ぐらいなんだかんだで薬物を使い続けて結局40ぐらいで本格的に。僕が今46歳なんですけど。

このダルクっていうところでプログラムを行うようになった。そのときは本当にボロボロでした。逮捕もされてたんで、大阪から離れた。逮捕されたとき家族から縁を切られた。大阪から離れた埼玉で逮捕されたんですけども。非合法の薬物をやった後で、睡眠薬を大量に服薬して、記憶をなくして夜中埼玉の町中を徘徊していた。そこに警官が、覚えてないが職務質問に来たところ暴れた。蹴飛ばしたりもしたみたい。僕自身は認めた。記憶をなくすような睡眠薬を飲んでたので覚えてない。

睡眠薬って、種類によっては、怖い。覚えてないってことはすごく恐ろしい。大したことないことだったんで。警官を蹴飛ばしたぐらいのことだったんでよかった。もし、誰かを傷つけていたりしたら、自分がそのことで苦

しむだろうと思うので。

睡眠薬は未だに怖い。覚せい剤なんかより怖い。40歳でリハビリの施設に繋がった時に、体もボロボロ。体中が痛くて、起き上がるのもちょっと大変。さっきも話したが、外に出たら誰かが自分を見張っていると感じた。今はありませんが。外に出て、一番近いコンビニにさきっと夜中に誰もいないところを。お弁当だけ買って帰ってきてる。そんな生活。誰とも会わない、誰とも話さない。そういう孤立した生活を続けていく中で、どんどん精神的にも病んできた。体ももちろん動かさないわけですからどんどん悪くなっていった。自分では、どうしていいかわからない。

繊維筋痛症っていう病名が付いていて、専門がね。当時は、まだ一般的に知られていない病気だった。原因が不明。特定できない全身の痛み。そういったものにつけられる病名。専門の外来に通っていた。先生に薬物も使用していますと言ってた。治療続けていくんだったらそういう薬物はやめないとウチでは面倒見きれませんよっていう話。わかりましたと僕も行った。でもやっぱり、さっき話された方も言っていましたけど、自分の意志でそれをコントロールすることができなかった。

その当時使っていたのが覚せい剤だったんですけど、覚せい剤って中枢機能をすごく興奮させて、24時間寝なくても活動できる。でも、考えたらわかると思うけど24時間寝ずに活動すると体に負担がかかる。僕の場合も。24時間後にまた覚せい剤を注射していたので、3日連続とか。動けなくなるまで活動を続ける。それってものすごく体に負担ですよ。そうすると、自分の持っている病気が悪化するというのは頭でわかっているが、覚せい剤を電話で買って注射するっていうのがやめられなかった。

もともと僕は、意志が強いほうだった。自分で決めたことはちゃんと守る。自分で決めたことは自分では守ることが、ちゃんとできたほうだと思っている。でも、薬物ではできなかった。コントロールできなかったから、

施設に入って、プログラムをやるよと決心した。最初は、共同生活をする入寮施設には入りたくなかった。共同生活って制約があるじゃないですか。当時、僕は東京で生活保護を受給していた。仕事をしなくてもお金はもらえる。一人暮らしをしていて、自分の好きなことができる。こんな状況の中で、こんな自由な生活を捨てて、不自由な共同生活。そんな制約のある共同生活の場であるダルクに入寮する決心をしたのか。本当にそれは死にたくなかったから。

さっきも言いましたが、自分が壊れていく。明らかに頭では分かっているんだけど、その行動をやめるこ

とができない。このまま行くと自分が崩れてしまうと本当に思った。自分は死にたくない。だからダルクに入った。

ダルクに入ってから、あれほどやめられなかった薬っていうものが、不思議なくらい止まった。自分場合、欲求っていうものが出なくなった。ダルクに入って共同生活、仲間と一緒にいるだけですけど、欲求って言われるもの……っていうところに記憶されている快樂の記憶。薬物使用のコントロールできない、行動を引き起こしてしまう。そういう原理らしいですけど。

その欲求っていうのが入ったときってというのは、それを止められたことって一度もない。薬物してきた経験の中で、やりたいと思ったときにそれを止められたことは一度たりともない。どんな手段を使ってでも、金が無ければ、自分の持っているものはすべて売りましたし、自分の好きなギターも CD も服も全部売って、とにかく金を。大阪が地元なので、西成に行けば道端で買えるんで。止めたことない。

今でも不思議なんですけども、ダルクに入って、今に至るまで欲求というのは経験したことがない。今でも思うんですけど、薬物依存症というのは治らない。やっぱり一度経験したことって脳の中に残る。その記憶だけを消すということは、今の科学では無理。僕の知っている限り。そういう意味で、僕も完全には治っていないと思っている。

今は、普通に薬物を使ってボロボロになる以前にできたことをやれるようになってきている。薬物を辞めて5年とか。お酒ものでない。徐々にいろんなことができるようになってきて、日常生活困ることもなくなってきて。将来的にやりたいことも今はあるし。10年ぐらい家族も会ってない。父親と一回会っただけであとは、母親と妹にいたってはどこに住んでいるかすら知らないですね。話したこともないし、手紙でコミュニケーションとったこともない。家族とも関係性を修復したい。そういう思いもありますね。

でも、僕がいくら関係を修復したいと思っても、自分が使っていた時に傷つけられた、迷惑かけられた家族っていうのは僕とはまた違った思いっていうのがあるだろうし、また地元、家に帰ってこられて、おかしな行動をとられても、ぶっちゃけ世間的にも嫌だなあという思いもあるでしょうし。

僕自身がちゃんとした生活をしているというのが基本ですけど、そんな中で関係とか修復とかね。できればいいなっていうのはね、僕自身が決めれることではないですけど、そういうことは思っています。

薬物を使う友達っていうのは僕にもたくさんいましたけども、ダルクに来る前ですけど、なんか自分とは違

うなって思ったですよ。どこが違うかっていうと、家族とかにそこまで迷惑をかけない。迷惑かけても許されている。人間関係っていうものをそこまでぶち壊していない。

僕は、薬のために、本来一緒に家で生活してきた家族に迷惑をかけて、最終的には父親に、頼むから死んでくれって泣きながらお願いされたこともある。別れるときは、これでお前と飯食うのもこれで最後やなと。そんな話を聞きながらも、自分は現実感もない。ちょっと決まっていたんで。現実感もない感じで聞いてたわけなんですけども。

そういう自分にとっても本当に大切なもの、そういう関係性をぶち壊す。なんでそこまで行ってしまったのか。そこが薬物使う人いっぱいいますけど、ダルクに来るような乱用者との違いがあるんじゃないかと僕は思ったりしますね。

周りとの関係性とか残ってれば、どっかで踏みとどまれるっていうか、そういうったものもあったりするんじゃないかと思ったりするんですけど、僕なんかが悪くなっていくプロセスでは、話せる人間がいない。頭もおかしくなって、奇妙な行動をとり始める。周りも関わりたくない。家族からも疎ましく思われる。世間、社会に出ても、なんかみんなが自分責めてるんじゃないかと。そういう中でどんどん悪くなっていった。

とことん悪くなって、自分にとっての……っていうのはなくなったからこそ、まじめにプログラムに取り組むことができた。自分の中で、性格上の問題としては、自己中心はもちろんですけど、根拠のない自信っていうのがあったと思う。非合法薬物を使うっていう時点で。

この中にもいるかもしれないけど、普通あんまり使わないと思うんですよ。法律で禁止されている、特に覚せい剤とか、悪いイメージがある。そこをやってみようという、不良でもないんですけど。そこを軽い気持ちでやってしまう。そのハードルを越えてしまえるという時点で、ちょっと現実をちゃんと認識できていない。根拠のない自信。自分は大丈夫だろう。

世間一般では、覚せい剤をやったら終わりだ、やめられなくなって人間ではなくなる。そういう話も僕も聞いてました。でも、自分は大丈夫だ。自分やっても自分が辞めようと思った時には、辞めれる。そういう根拠のない自信。今は、そういう自信はない。薬物に関しては降伏しました。

僕自身は薬物をコントロールして使うことはできない。だから、それを使わないようにするためにはどうすればいいかを考えている。一番いいのは、使うのを辞めようと思ったその人の輪にいるのが一番安全。

大学でバンドやってた時なんか、やっぱりギターうま

くなりたいと思ったら、自分よりちょっとうまいバンドの中で、ちょっとだけレベルの高いバンドに入って、いるだけで、いろんな影響受けるじゃないですか。話す内容とか。自分の成長にもなるし。同じ目的を持っている人と一緒に過ごすっていうのは、すごく。薬物の依存症からの回復っていうのにおいてもすごく大きな効果があったんじゃないかって思いますね。

Ⅲ. 2016（平成 28）年 7 月 27 日（水）のゲストスピーチ

【D さん】

おはようございます。高知ダルクから来ました、薬物依存症の*と申します。私の話をさせていただきます。

私は 16 歳でシンナーを覚え、当時付き合ってた彼がシンナーを吸っていて、私もちょっと興味を持ち、一緒に吸うことから始まり、ずっと一緒に吸い続けていたんですけども。

当時私は高校に通っていたんですけど、登下校の学校の通学路でもシンナーを缶に入れて、吸いながら通学したり、時には学校にもう行かなくなったりとかして、17 歳のころ、高校を中退することになり、それから 17 歳から水商売に入り、アルコールと薬物をずっと使い続けていました。

19 歳のころ、覚せい剤にも手を出し、もうどうにもならなくなって、ずっと薬を使わなきゃいけない生活が始まりました。

成人してからもシンナーを、ずっとまた吸うようになり、何度も家族から通報され警察につかまり、そして 20 歳の半ばに、何度も通報されて何度も警察官に、もうお前は懲りてないって、それで裁判をするって言われて、裁判をしたんですけど。

そのときに罰金 30 万円を払う、他に執行猶予 3 年が付き、その中でまた生活をするんですけども、まだ自分は懲りずに薬物のない生活っていうのがもうできなくなり、それでもずっと使い続けていました。

私はもう、精神も体もぼろぼろになって、吐血をして救急車で運ばれ、ICU に入り入院するんですけど、それでもまた退院したらどうやって薬物を手に入れよう、どうやって早くここから退院して、これからどうしようって、そういうことしか。とにかく頭の中が薬物しかない、思いがずっとあって。もちろん退院してすぐに売人の元へ行って、シンナーを手に入れ、また使い続ける日々がずっと続いて。

同じく水商売もずっと続けていたので、もう体はアルコールとシンナーと、時には覚せい剤と。とにかく狂うに狂っていました。

31 歳のころ、家族ももう見放す形になって、もう家には出入りするなって、家に来たら警察に通報するって言われて、私はもう、それから家にも出入りすることもなかったんですけど、ただのおどしかな、とか、もしかしてただ止めて欲しいだけにそういうこと言っているのかなと思って、私は家に行ってみるんですけど、家の中に母親がいて、二重ロックをかけられて、チャイム押してももちろん開けてくれない。

私は、狂うに狂ってたから、何度もインターホン押んですけど、そしたら警察が本当に呼ばれて、パトカー 5 台ぐらいで、気付いた時には警察官に囲まれていて。で、その場から離れるんですけども。

1 年間私は家族、両親と他に自分に妹が一人いるんですけど、連絡も取れない、会うこともできない、という生活があった。もう家族に捨てられたんだな、とか、嫌われてるんだなって、自分の中ですごく、今になって考えれば被害妄想なんですけども、ずっとそういう 1 年間で、とにかく辛い寂しいっていう思いをしていながらも、やっぱり手に持っていたのはシンナーでした。

どうにもならなくて、寂しさと、やっぱり昔の家族の仲良いころに戻りたいって思って、連絡を試みたんですけども、母が、もし本当に薬物を止める気であるのならダルクに行きなさい、って。あなたは一人で薬物をやめることはできないって。

もちろん私も 16 年間ノンストップでずっと使い続けてきて、しらふの生活っていう響きが、もう薬中だったので、全然感じることもできないくらいになっていて。じゃあ、私、そこに行ったら、ちょっとでもいたら、家族は私を許してくれるんだろうっていう、本当の軽い気持ちで、わかったって。じゃあダルクに行ってみるってということで、私は 32 歳のころにダルクにつながりました。

一番最初、北関東の栃木のダルクにつながり、とりあえず 1 日 2 日いれば、私はここから出れるとか、私はとにかく出るイコールこれからまたどうやって薬物を手に入れるか、そればかりしかやっぱり考えていなくて、毎日毎日やっぱり自分の中で逃げ出す計画をずっと立てていて。

同じダルクでは入寮生の仲を、仲間って言うんですけど、仲間の輪の中にも入らず、もちろん私はこの人たちとは違う、私はこんなに狂ってない、もちろん薬物依存症でも薬中でも何でもないって、ずっと思い込んでたし。この輪の中に入っても自分はどうせつまらないしって、ずっと孤立をしていました。

あるときに一人でテレビをボーっと見ていたときに、一人のある仲間に最初話し掛けられて。最初はすごくうざいな、とかほっといてよ、って、そっとしてよって、

私はあなたたちとは違うっていう気持ちだったんですけど、どこかで急にいろんな、この人たち薬物使っていて、どうせまた欲求もある人たちの集まりなんだよなって、自分の中で悪知恵っていうか、変な考えが出て。逆にこの人たちと仲良くなって、薬物を手に入れる方法を聞こうとか、一緒に手をだすとかよりも、とにかくこの人たちのルートを使って手に入れようっていう考えでしかなくて。

いろいろ、最初はやっぱり薬関係の話すごく会話の中で多かったんですけど、でもだんだんとやっぱり、ここにダルクに来た意味、家族に見捨てられて、自分も16年間ずっと使い続けてきて、警察にも捕まり、ICUにも入って入院し、じゃあ、自分はもう32だし、いったいどうしたいんだって考えを持つ半分、まだ半分もちろん欲求もあって。もうとにかく頭の中はごちゃごちゃで、ずっと正直本当にしんどかったです。

私が入寮してから3カ月経ってから、施設のイベントがあって、そこに親が来るってなったときに、私は親来るなら一緒に帰れるって。私は地元が宮城県なんですけど、宮城から両親が栃木のほうに来るって聞いたときに、あ、私を迎えにくるんだって、一緒に帰れるんだって、もういいんだって思って、身の回りの物をかき集めてバッグに詰めて、そのイベントの会場に行くんですけど。

でも、もちろん帰りたいてって言っても、もう嫌だっ言っても、もちろん両親は駄目だって、まだ頑張れっていう言葉があったんですけど、私はとにかくその言葉ですごく怒りの感情や恨みの感情が出て、そのイベント会場ですごく大声を出し、けんかをするんですけども。

その中で、男性の一人の仲間が間に入って来て。私よりももっとダルクの経験もそうだし、いろんな経験を含めて、いろんな話をしてくれて、そこでお前は一人じゃないって、一緒に頑張ろうって言っていただき、じゃあとりあえず1年頑張ってみろって言われて、私も性格的に負けず嫌いな所があるので、じゃあ1年やってみようっていう感じで、とりあえず1年頑張ってみました。

それからスタッフの下で、仲間のサポートをさせてもらいながらスタッフ研修としてやらせていただきながら、なんだか急に、暇だなんて、つまらないな、薬がないなんて思ってたんだけど、今度はいろいろなことを本当に与えてもらうようになったときから、急に別の意味でやる気を出して、ちょっと頑張ってみようかなって思って。

それから今度2年。2年になったらなつたで、今度アルバイトに出してみないかって言われて、アルバイトに出させてもらったりして。次は今度3年。3年になり、今度は宮崎のダルクのほうにいろんな事情があって移動するんですけども、そこで3年になったときに、「高校中退してるよね。高校もう一度いってみる」って言われて、

私は高校2年生までの単位があったので、高校2年生から通信制の高校に入校しました。

それから、何かいろんな意味で、いろんなことをこうやって与えてもらえてるって、何か一つでも自分に、しらふの生活もする中で、いろんなものを目で見たり、いろんなことを耳で聞いたり、いろんなものを感じられるって、何か楽しいよなってだんだん思えてきて。

そこからすごく、薬物への欲求がうまく消えてきたんですよね。とにかく、とにかく高校だけは卒業しようって、今しかないんだって、今これをやるべきなんだって思ったんですけども。

今回宮崎のほうから、先月高知ダルクのほうに移動してきて、またこっちの通信制の学校に転入するかたちなんですけど、残りの1年半で私は高校卒業っていう、自分自身の今の目標があって。やっぱり一つ目標を持つことで、これをやんなきゃって思う中で、やっぱり薬のことよりも、いろんなことが頭に入るようになり。最近もやっぱり、すごくたまに、本当にときたま、薬物の欲求が荒れるんですけど、でも、私はやっぱり一人じゃないって、こうやって同じ悩みを抱えてるって、同じ、自分は回復したいって願う仲間が側にいる。その中で私は今こうやって生活をさせてもらって、一度前の施設で逃げ出したことがあったんですけども、でもすぐに見つけていたスタッフに見つかって、また戻り。

今は3年半薬物を使わずにいる生活をさせてもらっています。まだ薬物に対しては、すっかり止めましたとか、まだ言えなくて、16年間やっぱりノンストップで薬物を使っていたので、たかがまだ、たかがって言うか本当にまだ3年半薬を止められてる状態だし、これから自分の中でまだ不安だし、もしかしてまた手を出すかもしれないし、でも多分、次また1回でもやれば自分は死ぬと思ってる。

もちろん、薬物使って、ハイになって楽しかったって思いもあったんですけど、今の自分は欲求が出たときには、辛かったとき、悲しかったとき、逆に思い出しながら、ああもう、絶対に自分はこの時みたいには戻りたくないって、もう絶対嫌だって、思いがすごくあって。その他にもやっぱりこうやって、側にささえてくれる仲間として、遠くから見守ってくれる家族がいるから、私は今こうやってしらふの生活を送らせていただいています。

最近、母親と連絡することがあって、やっぱり少しずつですけど昔仲が良かった親子関係、まではいかないんですけど、普通の会話ができるようになりました。私はすごく頭ごなしで、私は話ししたくないって感じだったんですけど、最近は本当にちょっとずつ、まだ受け入れてくれるっていう気持ちはないって、はっきり言われているんですけど、でも少しずつでも、ちょっとずつでもや

っぱり仲良くなってきたのかなって思います。

私の妹も同じ薬物依存症で、妹は覚せい剤を使い、未成年のときに鑑別所に入り、今度は精神的におかしくなって、入退院を繰り返し、今はまたグループホームに入寮していて、同じような、別のような施設なんですけど、妹も妹で自分の回復を目指して、そして自分を変えていくことでやっけていて、今家族それぞれが自分のことと向き合っています。

本当に病気がひどい家族なんですけど、やっぱり私も家族が大好きだし、親に対してうざったいとか、すごくうるさいとか、憎いとか、ダルクに入寮したときは、ここ出たらあいつ殺してやるとか、そんなすごい怒りの感情ばかりだったんですけど、でも親がいろんなことを調べてくれて、私をやっけてどうにかしたいって、私を薬物止めてもらいたいってという思いで、今回こうやって私をダルクに導いてくれたんですけど。私は今憎しみだった自分だったんですけど、今はすごく感謝しています。

今は、これからまた秋から学校に行くんですけども、とにかく自分の目標は高校卒業し、とにかく薬物を使わず生きて行きたい。このまま死ぬまでしらふの生活を続けていきたい。そして、まだ高校卒業したらとか、その先はって、今は何も考えてません。

とにかく薬だけには絶対手を出さないように。そして、まだ私は一人になったらまた、寂しさとか何かで使うと思うし、また最近こうやって高知ダルクに来させてもらって、新しい仲間と出会わせてもらって、仲間にもすごく支えてもらって、仲間にも感謝しています。

私は、とにかく、ほぼ自分の記憶も結構途切れ途切れなんですけど、やっぱり薬を使った生活が本当の自分っていうか、それが本当の自分、あたり前の生活っていうか、そこまで本当に狂っていて、しらふの生活っていうのは逆に変な感じがずっとしていたし、急に止め始めたときには、手にシンナー持っていないんですけど、持つてふりして、このままこうやって、手で口に当てたりとかして。

今はもう治ったんですけども、そんな癖とかもずっと出ていて、私はもうどうなってしまっただろうって、このままどうなんだろうって、やっぱりそういう気持ち、混乱したし、不安にもなったし。

でもやっぱり、いろんな仲間の教えとか、仲間の経験とか、じゃあ一緒に頑張ろうよって言ってくれる仲間、その言葉で私は、やっぱりどん底からすくい上げられたなって思います。まずとにかく、またこうやって自分の感情とか日常生活で薬物への欲求は必ず出るとも思います。でも、そこで逃げ出す、使わず、ということをやっけて自分の中でちゃんと頭に入れて、自分の目標を達成できるように頑張りたいと思います。ありがとうございました。

【Eさん】

こんにちは。私は薬物依存症の**と言います。私は小学生のころからいじめに遭い、父親も私が11歳のころからアルコール依存症になり、会社が休みのたびに、飲んでは暴れていました。学校に行けばいじめに遭い、家に帰れば父親のアルコール問題で精神的にも追い詰められ、強迫神経症になり……などを選択するのが止まらなくなりました。母に、居場所がないと、とっさに言いました。

高校に入学してからは学校が楽しくなり、病気も緩和されました。高校を卒業してから就職をして、正社員、アルバイトと転々とし、22歳のときに手に職を付けたいと思い、美容師を志し、学費のために水商売に行き、3年間働きながら2年美容学校にも行き、26歳で国家資格を取りました。

就職をしましたが、パワハラでうつになり、辞めてしまいました。悔しくて、そのいじめた先輩をすごく恨み、精神科にも行くようになったのですが、医者による多剤処方……ようになりました。

処方薬、市販薬の大量服薬を約7年間続け、その間風俗や援助交際をしているときに相手の男性から覚せい剤を勧められ、注射で覚せい剤をするようになり、男性と二人のときや一人のときもあり、3年前母に通報され、家に警察が来ましたが、そのときはしらばつくれましたが、しらばつけれなくなり、自ら麻取〔注：厚生労働省の麻薬取締官〕に自首をして、1年6カ月の執行猶予3年で出てきました。

もともと持病の間質性膀胱炎が覚せい剤で悪化したんで、もうしないと決めていたのに、1年後に再使用してしまい、捕まって刑務所に行くのが怖くて、先行く仲間たちに「施設に行きなさい」とアドバイスをもらい、高知ダルク『ちゃめ』につながりました。

薬物を使った理由は、生き辛さが問題になったのかなと、施設に来て気付きました。薬物依存症になった責任はないけど、回復には責任があるので、仲間とぶつかることもあります。一生回復し続けないといけません……。最後に、ここにいる皆さんは将来先生になる人たちなので、私はこういう先生がいてくれたら良かったと思うことを伝えたいと思います。いじめられているときに邪険に扱うのではなく、じっくりと話を聞いて欲しかったです。向き合ってほしかったです。今日は話を聞いてくれてありがとうございました。

【Fさん】

皆さんこんにちは、**です。私は中学校のときに、とても大切な人を亡くしました。そこで最初に覚えたの

は、処方〔注：医師の処方を要する薬、処方薬〕でしたね。処方です。

その大事な人っていうのは、白血病です。慢性骨髄性白血病でした。そのときに私も一緒に死のうということで、処方のお薬を一緒に飲んで、この人と一緒に死のう。恋愛感情とかじゃなくて、大切なパートナー、親友、幼なじみ以上でした。

でも死に切れず、それからずっと処方に走りました。どんなに辛くてもずっと一緒にいてくれるっていう思いがあって、でもいなくて。毎日が寂しい思いでした。

私の家族は、父、兄、私、母なんですけども、私の母は私と兄を置いて、私たちを施設に入れて母と父は離婚しました。兄が大きくなって、自分の本名は**って言うんですけど、「**、お兄ちゃんね、大きくなったら**のこと守ってあげるから」と言いながら私の前を去っていきました。

そして私も大きくなるにつれて、兄が極道の世界、父も極道の世界、そして私も大きくなるにつれて極道の世界に入っていきました。そして、今、懲役に入っている内縁の夫も極道でした。私はそこで、いろいろ切羽詰まって、その極道の旦那と知り合い、覚せい剤を覚えました。

こんな良いものはない、こんなに辛くて、寂しくて、イライラしてる時にも、この覚せい剤があれば何も怖くない、と思うようになりました。毎日、毎日のように1日2回、3回、3パケ4パケと打つようになりました。

だんだん自分の体がぼろぼろになってきました。ご飯も食べなくても済む、寝なくても済む、黙って家の掃除するだけでもいい、何かに集中できる、こんな楽しいものはない。無論、肉體関係にも使いました。

私は懲役……に入りました。**刑務所、執行猶予2年4月、2回目1年4月、実刑をくらいました。称番号氏名**番**、こうして私は2度目の懲役暮らしが始った。

全ての人々が覚せい剤、頭の中にあるのは、ここ出たら覚せい剤やろう、絶対やろう、今度はばれないようにしてやろう。でも、その**刑務所は薬を一切くれませんでした。どんなに頭が痛い、どんなに寝れない、ばんそうこうさえくれない。「胃が痛いです」「工場でなさい、気の持ちようです」。「寝れません」。「それもまた気の持ちようです」。「あの先生が怖いです」。「そんなの関係ありません」。

私は精神的に参ってしまい、円形脱毛症にもなってしまいました。1カ月に16キロ。私は怖くなり、ここは本当に来るところじゃない。でも、どこかに頭の中には、覚せい剤をやろう、今度はばれないようにしよう。医務に言っても、何言っても薬はくれませんでした。

悔しかった。こんなに悔しい思いするんだったら、死のう。私は自分の部屋に入って、タオルで首を閉めました。自傷行為です。調査、懲罰。1回の調査で20日も座る懲罰。私は死にたかった、首だけじゃない、手首にも自傷行為をした。死にたい、こんな辛い思いするんだったら死にたい。でもしょうがない。自分が覚せい剤をしてしまったから、こういう目に遭ってしまった。

仮釈について、刑務所には分類〔注：刑務所の部署の一つ〕というのがありまして、自分が、仮釈に入ると分類っていうのが付きまして、自分の帰り先を決めなくてはならないことがあるんです。**刑務所から**刑務所に、私の知ってる統括刑務官が3人来ました。その分類統括が私の知っている統括で、前は工場の主任をやっていた統括が私の所にやってきて、「**さん、帰り先を決めます。来てください」という話になり、そこに初めてつながった**の施設、ダルクの施設長と寮長が来ました。

話を聞きました。「**さんはダルクっていう所はどういう所か知っていますか」、「薬物依存症の所ですよ」。私は何にも知りませんでした。でもダルクっていうのは知っていました。でも自分は依存症じゃないからっていう気持ちがあり、そんなところには行かないという気持ちがありました。

「でももし、自分でここで変わらなければ、自分は変わらないよ」、寮長が言ってくれました。ダルクというのはプログラムがあり、回復する施設でありミーティングっていうのもあり、自分はどこか、自分が依存症じゃないかっていう気持ちがあり、右の耳から入り、左の耳に逃げてきました。ダルクの人たちが帰り、統括が私の所にやってきて、私の気持ちを、本当の気持ちを言わなければという気持ちになり、「私には幼い子どもがいて、3歳のときから会ってない子どもがいます。先生知ってますよね、前一緒だったから。**刑務所で一緒だったから知ってますよね」って。

「知ってます」って言われたときに「私は子どものところに帰りたいです」、「どうしてですか」、「あなたの子どものためではありませんよ、私の子どもですよ」そういうふうに行った。

「よく考えてください、**さん。今の体で、あなたその薬の入った体で、子どもを抱けますか」と言われたとき、私は何にも言えませんでした。

「1週間の猶予をあげます、考えてください」、「わかりました」、私はそういうふうに行って1週間考えました。どうしよう、ダルクに行ったほうがいいのか、3歳から会ってない子どもの所に行っているのか、すごく悩みました。

1週間後、私は茨城ダルクの寮長に、施設長に二人に

電話をかけました。「ダルクに行かせてください」。こうして私は石岡ダルクにつながりました。出所の日に、寮長と施設長に私が出た言葉は、普通はお願いしますと言うのに、私が出た言葉は「私は薬で死にたくありません、助けてください」、これが精一杯の私の言葉でした。こうしてダルクの生活が始まりました。

私は刑務所において、人を信じることもできず、仲間ということも信じることもできず、人の目を見ることもできませんでした。信じない、絶対信じない。私はダルクにおいて、4回出ていきました。

ダルクは刑務所の受け皿、確かにそうです。何時に起きて、何してかにしてミーティングしてプログラム組んで。それが私は嫌で嫌で、4回出てって、その4回目に私は社会に帰りました。

頭の中には、絶対覚せい剤はやらん、これだけは決めています。やりませんでした。だけれど、処方の方が私はすごく強くて、処方の方に走ってしまいました。飲まないようにしよう、きょう飲まないようにしよう、きょうは気分がいいから飲まないようにしよう、きょうは気分が悪いから飲もう、飲まないできょうは寝てみよう、の繰り返しでした。

こうしてずんずんと、私は処方の方に走っていきました。もうこれじゃ、自分だめになる、もうだめだ。これじゃ覚せい剤の方に走ってしまう、怖い、自分が怖い。石岡のほうに、茨城ダルクのほうの代表のほうに電話を掛け、「助けてください、薬でまたおかしくなりそうです」、「わかった、でももう茨城のほうには入れないよ」、「それでもいいんです、ダルクにつなげてください」と私は高知ダルクにつながりました。

駅まで施設長が迎えに来て、またダルク生活が始まった。高知ダルクは前のダルクと違って、自由もあるし、またミーティングを組み、プログラムを組み、私の心の中には、どこかしら、ここのダルクは違う、違うだろうって、なんでこんなはちゃめちゃなのって、私いつまでも思っていました。

自由行動、好きな時間に、ミーティング以外は自由行動。違うだろうって私は思っていました。でも、私がつい最近調子悪くて過呼吸になり、解離になってしまって、施設長がずっと私のことを看てくれました。横になって、ずっと私の背中を押してくれました。私はそれがわからなくて、解離になると何をすることもわからずに、ずっと……を振り回してました。

仲間が大粒の涙を流して泣いていました。「**、どうしてみんなが助けてるのに、そんな……を振り回すの」。死にたい、と私は思った。申し訳ないとも思った。施設長にもそう思った。そんな施設長に私はぶつかってしまった。「ミーティングってなんのためにやるんですか、具

合悪ければ休んでいいんですか」、手をあげてしまった、あんなに助けてくれた施設長に。辛かった。

でも、「あなたは子どもいるでしょ。回復しなさいよ、悔しかったら回復しなさいよ、10年経ったらあなたの話を聞きます」。悔しかった。私には子どもがいて何にもできない。その通りだと思った。

旅立とうとしている仲間が、私に言ってくれました。「回復したかったら、黙って一人でもいいから座ってなさい、ミーティングしてなさい」って話をしてくれました。そして、旅立とうとしている仲間が、「乗り越えられない壁はないよ、どんなに乗り越えようとする壁はないよ、真実はひとつ」私に言ってくれました。「どんなに辛くても手を出しちゃいけないよ、仲間に手を出しちゃいけないよ、マコトならやれる、居続けてください、居続けろ」これが仲間からのメッセージでした。

今、自分でも怖いです。いつかまた、薬を使ってしまうのではないか、自傷行為をしてしまうのではないか。あるいは処方の方に走ってしまうのではないか、また……振り回してしまうのではないか、という自分がいて。

でも刑務所には入りたくない、高知のダルクで回復したい。自分は悩みました。どうすれば回復になるんだろうか。自分は覚せい剤を使って、お金も友達も仲間も子どもも全部失いました。一番最初につながった寮長に言われました。私は全てを失ってしまった。「でもお前にはまだ12ステップがあるだろ、それがあってもまだいいよ」。

ある仲間が、1日ステップ1を時間でもいいから、30分でもいいから読みなさい、無力って言葉を確認なさい、そうすれば絶対わかるから、道を開いてくれるから、導きがあるから、仲間に委ねなさい、施設長に委ねなさい、寮長に委ねなさい」。どうすれば委ねられるんだろうか、私はいつもそればかり考えています。

私は処方の方がすごく強くて、依存もすごく強くて、何かあるたびに「薬ありませんか、ロキソニンありませんか、歯が痛い、頭が痛い」。今、ちゃめの施設で、先行く仲間に薬のほうを管理してもらい、飲んでるところも見せる。自分でもやっぱり怖いんです。またスリップしてしまうのではないか。いつ子どもの所に帰れるんだろうか、何ができるんだろうか自分で、回復してから。いつになるんだろうか、回復できるのか。そればかり考えています。

もう少しで、私の内縁の旦那が帰ってきます、懲役から。私はどうなるんだろう、また薬を使ってしまうのではないか。なぜ私が極道の世界に入ったんだろうか、強くなりたいため。何のため？ 寂しさのため？ 孤独なため？ 悲しい、辛い、自分でもわからない。

いつの間にか極道の世界に入ってしまった。本家家元

の姉さんから、「お前は極道には向いてないよ」。

私は今年の2月に33年間会っていない母に会いに行きました。懲役で、母の手紙のやり取りをしていました。最初はびっくりしました。母からの手紙でした。『33年間捨ててごめんなさい』、私は何とも思いませんでした。何で今さら。『キミエちゃん、愛しています』、ふざけんなって。

月に3通……に余るほどの手紙が毎日届くんです。私はうれしくなかったです。『ごめんなさい、許してください、私が悪かったです、あなたたちを不幸にして申し訳なかったです』、

私は2月に会いに行き、仙台なんですけども、新幹線でやっぱり会いに行きました。そのときは、お酒も飲み、マンデーなんですけどもスリップしてしまい、無論、処方薬を飲みながらですが薬を飲み、ビールを飲み、お酒を飲み、日本酒を飲み、積もり積もるお話をして、私はやっぱり芽生えたのは「許せない、こいつ絶対に許せない」という気持ちになり、アルコールの勢い、そして憎しみが混み上がってきて、母親の首を絞めてしまいました。

だんだん力が入っていき、母の顔を真っ白になり、唇も真っ青になり、手も足も力が抜けていき、どんどん憎しみがこみ上げてきて、「こいつを殺してやる、そうすれば自分だって幸せになれる、薬だって止められる」、そう思うようになりました。あともう少しで死ぬ。でも私の力が入っていかなかったんです。横にあったタオルで思いっきり首を絞めました。

自分、我に返り、手を離し、私は泣きながら「お母さん、お母さん」反応もありませんでした。私は急いで110番に電話を掛けました。「私の母を殺しました」2分もしないうちにパトカーが飛んで行き、事情聴取をされ、むろん、……も持っていました。

運よく母は今も元気ですが、私は仙台の留置所にまた入りました。母は、私のために、私の娘ですから許してくださいという、検事さんに何度も頭を下げていました。私はそれで……出てきました。

そのときに、茨城ダルクの代表の人が5時間も掛けて、石岡ダルクに迎えにきてくれました。「今の気持ちを忘れるな、こうやって迎えにきてくれたこと、こうやってダルクにつなげてくれたことを忘れるな、絶対に忘れるな、ダルクは仲間だから、何があったって迎えに来てやる、自分が本当に回復したいって気持ちがあれば、どんなに遠いところでも迎えにきてくれる、つきあう」。

私は去年の7月30日に懲役に入っているときに、もう少しで命日なんですけど、7月30日に祖母を亡くしました。懲役に入る前に、もうそろそろ逝っちゃうなっていうのは分かってました。でも、そのとき7月30日に亡く

なった日も私は知らないで、頭の中は覚せい剤を使う、使ってしまう、使いたってことを考えていました。

そのおばあちゃんは、ずっと私を見守ってくれていました。何が食べたいって言えば作ってくれたり、民謡があれば民謡に行ってくれたり、日本舞踊やりたいうって言えば日本舞踊やらせてくれたり、三味線、バイオリン、琴、フルート、何でもやらせてくれました。

そんなおばあちゃんが死んだって聞いたのは、石岡ダルクを脱走したときにどうしてもおばあちゃんのことを気になって、公衆電話に、自分の持っているお金で自分のいとこの家に電話を掛けたときに「おばあちゃんどうしてうるの」。伯父が出たんですけどね。私の父の兄なんですけど。「死んだよ、**家誰も来なかったよ、俺以外来なかったよ」。「そう、いつ死んだの」。「7月30日」。「わかった」。「8時40分、老衰」。

私はそれを聞いて、途方に泣きながら雨の中5時間も6時間もおばあちゃんのことを考えながら歩いていました。あいにくおばあちゃんは**という宗教に入っていました。私は全然意味もなく、名前だけ入っていて、ただおばあちゃんがずっと生まれてから入っていました。ふと歩いている道を見て、たまたまそこに**という教会があつて、あ、これだっと思って。私はおばあちゃんのためにおばあちゃんのことを知りたくて、その**に入りました。そこには支部長さんとかいろんな人がいて、「とにかくさあ、安心ください」。

泣きながら正座してずっと見てました。「おばあちゃん、ごめんね、こんな孫で、薬を使って刑務所に2回も入って、ごめんね」って。

おばあちゃんが、私には聞こえたんですが「もういいよ、キミエ。十字架降ろしなよ、もどきなさい、ダルクに」。ハイヤーパワーではないですが、私にはそう思えて、すぐさまに石岡ダルクに電話を掛けました。「寮長、戻ります」って。「わかった、なら迎えに行くから」。今回復していなくなった仲間と、寮長が迎えに来てくれました。

寮長、何も言わずに、ただ一つだけ「よく戻ってきたな」頭をなでてくれました。こうして私はダルクのいろんな思い出がありますが、こうやってみんな回復してって、旅立つ仲間もいれば、回復していく仲間もいると思いますが、私は何年かかるかわかりませんが、また薬を使わない人生、しらふな人生でやっていきたいなと思います。ありがとうございました。

【Gさん】

こんにちは。依存症の**です。ダルクっていう施設を今はやっています。

私は高校1年か高校2年のころから薬を始めました。市販薬が一番最初で、その次シンナー、大麻。覚せい剤

は結構遅くてですね、27とかそのくらいだと思います。あ、咳止め、忘れてました、一番好きなのが咳止めです。咳止め大好き。薬を使いながら17年間生活してきました。

17年、27ぐらいのときに倒れるようになりました。薬を入れすぎて倒れる、薬が切れると倒れる。先生は『意識消失発作』って名前付けてくれたんですけど、倒れるような脳波をしてたそうです。「きれいな脳波ですね、倒れるような」、みたいな。なんか、そういうふうに言っていましたよ。

17年間薬を使いつづけて、もうそのころは薬が一番でしたね。死んでもいいから薬を使いたって思っていました。死ぬことは怖くないって。でも、話が前後するんですが、子どもが私には二人いてですね、子どもにご飯を作ってるときにバタンって倒れたんです。

バタンって倒れたときに頬骨にひびが入って、子どもの顔が目の前に浮かびました。お母さん、大丈夫、大丈夫？って。こんないっぱい冷やしてくれたりもしたんですけど、そのときに私は死ぬかもしれないって思いました。

もう死ぬかもしれない。そう思ったときに、たぶん心の底で生きたいって、思いが出てきたのかなって。今考えるとですよ。それまでは死んでもいいから薬を使いたって思ってたし、薬がないと私は生きていけないって思っていました。

でも、その倒れて死ぬかもしれないって思った瞬間に生きたいって思ったんだと思います。テレビで、当時おはようジャーナルっていうのをやってたんですけど、そこで薬を止めるために病院に入ったっていう人の話を聞いて、じゃあ解毒入院しようって思って、母に相談しました、もう薬止めたいんだけどって。

そうすると、うちの母は「お酒みたいに時々飲むことできないの」って話をして。うちの母天然で、うちもずっと天然なんですけど、母、ど天然。私も、天然、子どもも小天然みたいな感じで、天然の一家なんですけど。っていう話をしてたんですけど、できない。完全に切らないとまた薬の欲求が入って、欲求が入ると使って、それはもう天井知らずですね。死ぬ直前ていうか、倒れるまで私は使い続けるし、倒れても使い続けるしっていうことになります。

だから、とりあえず一端薬を抜きたいんだっていう話を母にして、うちの母は精神保健センターに相談にいった、当時、結構古い話でもう何十年前の話なんですけど、当時薬物依存症とかっていうのは、あまり知られてなくてですね、精神保健センターの所長さんが病院を探して、この病院が良いんじゃないかってその病院に入院させもらうのに3カ月ぐらい待ちました。

病床がいっぱいで入院することができずに、それまで私は、仕事はともかく行ってたんです。薬代を手に入れるには仕事をしないといけない、薬を使うためには仕事をしないといけない、っていうことで仕事をしてたんですけど。要は薬代欲しさに仕事をしてた。

そこでもバタンバタン倒れながら仕事をしてたんですけど、仕事をしながら待って、でも職場も12月に首になって、入院したのが3月ですね。3月まで待ってました。先生が、「辛いよね、早く入院させてあげたいのにな」って言いながら。でも私はその病院のトイレで咳止め飲んでました。咳止め飲むと、すごい甘い匂いがするんです。先生は「飲んできましたね」みたいな。「はい」って。

何かある前にはともかく薬を入れないと、動けないんです。薬がないと一歩も動けないみたいな。薬が手に入るまでは、熊さんのようにうろろうして、薬が充満した体で動いてるみたいな。もうぷすって刺すと薬が出てくるんじゃないかっていうぐらい、薬の中にどっぷりつかった生活でした。

すみません。話がね、私あちこちするんです。発達障害だと私は思うんですけど、こう頭の中にぼんぼんっていろんな情景とか枠とかがあって、普通の皆さんは整理されて話ができるんですけど。私は上にぼんぼんて浮かんでのをつかまえて話す、みたいな。

なんか物事を理解するときも、ぼんぼんってあるのがある日突然それがつながって全体になって、「あ、わかった」っていう、こういう理解のしかたなんですけど。発達障害があるせいで、今思うとですね、いろいろな物事がわかんなかったんだと思います。18ぐらいのときに「しっかりしなさい」とか「**さんのような生活しないで、地に足付けなさい」って言われたんですけど、それはどういうことってわかんなかったんですね。それはどういう話なのって。

私は18で大学行くんですけど、大学は心理学ですね。心理学専攻したんです。自分の考えてることと、人の考えてることが違うっていうのは知ってて、普通一般の人はどういうことを考えるんだろうっていうので、心理学を専攻してるんですけど。でも実際は心理学を学ぶ所までは行けず、教育学部2年で妊娠して出産、大学は辞めてしまったんですけど。

その18ぐらいのころにはもう、自分の感情と人の感情が違うと知ってました。人はどういうことを考えるんだろう、まあ知ってたんですけど、それが発達障害だという言葉もなく、こんなもんだろうとしか思えない、自分しか知らないんで。

今考えてみると、それもきっかけの一つ。さっき仲間が生き辛さっていうのあったんですけど、物事がわからない、理解能力がないっていうか、ノーマル装備をしてないっ

ていうか。普通の人間のノーマルな装備がないっていうんだと思います。

で、薬等であって、何かのために薬を使ってたっていうよりは、薬が好きです。薬の世界が好きですね。幻覚見るのも好きですし、3次元4次元になる世界もハイも好きですし。

ただ、薬の世界ってそこで終了です。いつまでたってもどこまで行っても、薬の世界でしかない。金魚鉢の中に住んですようなもんで。その世界で留まってるだけです。

しらふになって、周りとのコミュニケーションができるようになって、いろんな刺激を受けると自分を成長させることができるとわかりました。自分が成長していくと、世界が変わってきます。人に対する自分の接し方も違うし、相手からのことを受け取ることができる。薬を使った世界では、自分の世界。薬と自分しかいないんで、外界とは切れてます。薬の世界だけに頼ってるだけ。そのことがしらふになって初めてわかってきたっていうか。

自分を成長させていくと、周りは変わっていくっていうことがやっとわかったっていうか。そこでしらふの楽しさですね。しらふで生きるって楽しい。そこにたどり着くの何年か掛かりました。

薬が止まっても、世界は白黒テレビを見るようでした。薬を使っている社会はカラーテレビの世界で、楽しいしポップだし、お日様は話掛けてくるし。お日様にこにこ話かけてくるんです。ゲンキーみたいな感じで話かけてくるんです。

でも、しらふになると、白黒の太陽がいる、みたいな。白黒の世界です。それがだんだん色が付いてきて、風がわかるようになり、感覚も全然変わってきます。それまでに何年かかかります。しらふで生きることってというのは、本当に生まれたての赤ちゃんが生き始めるみたいな、よちよち歩きして、いろんな感覚も人の言葉も。

人の言葉もわからないんですから。いろんなことがわかるようになり、生活できるようになり、仕事もできるようになり、自分を変えていくっていう作業を始め、受け入れられてるといこともわかり、自分の感情もわかり。自分の感情もわからなかったんで。なにをしたいのか、どう感じているのか、そんなこともシャットアウトしながら薬を使ってたんで。

生き始める、生きることをまた始めるって思いました。何年か掛かって、やっとしらふで生きるとは、いいんじゃないか、みたいな、ぐらいですね。楽しいって思えるようになったら、しめたもんだと思います。生きることが楽しいとか、仲間といることが楽しいとか、どこか行くことが楽しいとか、人と会うのが楽しいとか、お花見するときれいだとか。そういう感情が戻ってきて、やっ

と初めて薬なしで生活できるようになるのかなって思います。

薬の刺激はものすごいです。本当にまた戻りたいって思うのは、たぶん当たり前のことだと思うし、しんどいときにまた戻りたいって思うのもあたり前のことだし、それを防ぐツールをたくさん用意しないとイケない。

仲間もその一つですし、自分が変わってきたって思えることもその一つだし、人と話してて楽しい、仲間と話してて楽しい、自分がここで話をしてみんなが話を聞いてくれて、少しでもこれから先生になっていく人たちが、私たちみたいな子どもに出会ったときに、「あ、きつこういうことを考えてるのかな」とか「この子の話聞いてみよう」とかって少しでも思ってくれたら、きょうここで話をさせてもらった意味が出てくるのかなって思いつながら、今はいます。

私は今は、**の仲間たちといます、といっても一緒に生活はしてないんですけど。毎日**の仲間たちの顔を見て、まあ、園児ですね。園児なんです。さっき仲間が、手をあげたっていう話をしたんですけど、自分の思いだけで、自分の思いが一生懸命で頭がいっぱいになって、ぱっと飛びかかってくるんですね。園児じゃないか、これは、みたいな。

で、園児だから、成長できます。園児だから回復成長して可能性がたくさんあります。だから、とりあえず今与えられた時間、与えられた仲間たちと一緒に過ごしていくことで、成長を見守っていくっていうか、伴走するって言われてるんですけど、支援者は伴走していく、共に歩くってことなんですけど、その時間一緒に過ごすこと、私は一緒に過ごすっていうふうに思ってるんですけど、一緒に過ごすことしかできません。

こうしたほうがいいよ、ああしたほうがいいよとって言うことはできるんですけど、それはするのは彼女たちだし、彼らだし、その人たちです。ただ、一緒に時間を過ごす。そして同じことをしたりとか、いろんなプログラムがあるんですけど、一緒に時を過ごすのが一番大切なことかなって、今は思っています。

その中から何をつかみとっていくかは、自分たち次第なんで、また戻って来てもいいですし、回復するのにもすごく時間がかかります。私もそうでしたし、私は特に多分時間がかかった人だと思います。10年とか時間が経って初めていろんなことがわかるようになるし。

ただ、その間に仲間たちが言ってくれたこと、それは心の中にちゃんとしまわれてるんです。先生たちが言ってくれたことも、たぶん心の中にしまわれてます。しまわれてて、時がくると、その子が理解できる時になるとボンって浮かび上がってくるんです。

だから、昔仲間が言ってくれた言葉、それを理解して

実行するべきときになると、ちゃんと花開いて言葉がわかってきます。そのときまで心の中にいろんな言葉はしまわれているんだと思いますが、先生たちの言ったことも、例えば中学時代にはわからなかったことが、22歳になって心の中に、「あ、あれだったんだ」というふうになるように、今私は自分の伝えられることを、今いる仲間たちに伝えています。

その子たちが今すぐはわからなくても、3年先5年先10年先でもいいんですが、「あ、こんなこと言ってたな」とわかってくれるといいかなって思います。私自身もたくさん仲間たちが掛けてくれた言葉が、そのときになると時を経てパッと浮かびあがってくるんですね。不思議ですね。浮かび上がって、ああ、わかった、じゃあこうする、

そんなことなんですけど。私の回復はちょっと変わってるかもしれないですし、100人いたら100人、10人いたら10人の回復の道があって、一応それぞれ性格も違うし、生きてきた道も違うし、環境も違うしって、いろいろ違う中で目指すは薬物依存からの回復っていう一つの、筋みたいなものがみんなの中にはあるんです。

それを持って、生まれも違う、性格も違う、何もかも違うのが薬物依存症っていう1本の綱ですね。1本の綱を持って多分歩いていっているのかなって思います。時間はすごくかかるんですけど、私の受け持ちの、担当してる子の時間、仲間たちと一緒に歩いていくっていうことをして、歩き続けていきたいかなって思います。

よくハイヤーパワーって言うんですけど、神様って概念なんですけど、今は10年ぐらい経ったときかな。薬が止まって10年ぐらい経ったときに、神様のかけらが自分の中にあるんだって、宗教の話じゃないんですけど、神様のかけらが自分の中にもいるんだっていうのが分かり始めました。

12のステップっていうのを私たちはやっていくんですけど、12のステップは神様のかけらを見つけるために、神様のかけらが入ってる、神様との通信、わかるかな、私の言ってること。わかんないかもしれないですけど、神様と交信するため、私はこの道で間違っていないでしょうか、とか、これでいいんでしょうか、とか、どうしたらいいんでしょうか、とか、今私利私欲に走っていないでしょうか、とかそういうことを神様に相談します。

そうすると神様は本当にしゃべってはくれないんですけど、こっちの方向って導いてくれます。その方向に私は歩いていきます。っていうことが分かるのに10年くらい掛かりました。10年くらい掛かって、やっと「ああ、そうか」とわかって、そっちの方向に行こうって、宗教家では本当にはないんですが、っていうふうには思っています。だから、いろんな道具を使いながら、私自

身を道具にしながら生きていければいいのかなって思います。

私は道具なんで、みんなが使ってくるとより輝きを増すっていうか、自分自身のためにももちろん生きるんですけど、仲間たちに使ってもらえることによって、いろんな人に利用してもらえることによって、多分私はちょっとでも輝くことができるかなっていうふうには思います。

いろんなバラバラなことを話しててるんですが、何かどっちかっていうと何が聞きたいのかなっていうことのほうがいいかな、とは思うんですけど。何か仲間たちの話を聞いて、何か質問をしてもらったほうが、あと10分、有意義にできるかな、と思います。あ、ありがとうございました。私の話、以上で終わります

